

# 時 栃 報 幼

題字／栃木県知事 福田富一 氏

第 111 号

平成24年12月20日

(社) 栃木県幼稚園連合会

〒320-0033 宇都宮市本町12-11 栃木会館2階

☎028(622)2821 FAX 028(622)2816

●編集人／馬場章信 ●発行人／石嶋 勇

■栃幼連ホームページ <http://www.youchien.or.jp>



こどもが  
まんなか  
PROJECT

第19回

## ピカピカの栃木県

平成二十四年十月十三日(土)～十月二十七日(土)

第十九回ピカピカの栃木県(公共施設美化十万人運動)が、十月十三日から二十七日の二週間を基本として県内の多くの幼稚園で、大勢の親子が参加して展開されました。最寄りの駅、公園、散策道路等の公共施設周辺のゴミ、空き缶拾いや落ち葉清掃などの環境美化に汗を流し、幼児期から、地域を愛する心・奉仕の心を育み、公共心・地域への愛着心の芽生えの助けになる大きな事業でした。

県内では未だに原発事故に伴う放射線飛散の影響が残る多くの地域があり、放射線量の測定がされています。その面の安全性には十分に神経を使っています。また新たに矢板市の国有林に難しい問題が発生しています。この美化運動がこの状態でいつまで続くかが疑問との声も聞かれます。幼児の健やかな

心を伸ばすことはもちろんですが、さらに将来のある子どもたちの身体の健康への不安払拭も必要な時代になってきました。

当の幼児たちは、美化活動を自然に受け入れて、明るく楽しく活動し、元気いっぱいですが、「いっぱい落ちてくるね。」「いろんなゴミがあるね。」の会話の中に私たち大人が考えていかなければならない内容があるのを感じます。一緒に活動していたお母さんたちも、「捨てなければ汚れないのにね。」「と問題点を把握していました。

何はともあれ、保護者も一緒に行うことに意義があつて、親子のみならず地域の人々との「絆」も芽生えきているようで、本県の幼稚園に広がった「大きな有意義な活動」と胸を張って言つてよいと思います。

(総務副委員長 小瀬昭一)

参加園

142園

参加人数

25,841名



### 足利地区 花園幼稚園

期日 10月24日(水)

場所 伊勢児童公園

参加人数 園児・教職員 43名



### 芳賀地区 高ノ台第二幼稚園

期日 11月3日(土)

場所 年長 幼稚園から西郷西区運動公園広場  
年中少 幼稚園から中峰公園

参加人数 園児・保護者・教職員 311名



### 宇都宮地区 みどり幼稚園

期日 11月2日(金)

場所 共和大学周辺・キャンパス内

参加人数 園児・教職員 78名



各園の取り組み





### 小山地区 静林幼稚園

期日 10月18日(木)  
場所 日枝神社  
参加人数 園児・保護者・教職員  
125名



### 栃木地区 国谷幼稚園

期日 10月26日(金)  
場所 おもちゃ博物館と周辺道路  
参加人数 園児・保護者・教職員  
210名



### 佐野地区 洗心幼稚園

期日 10月29日(月)  
場所 観音山緑地公園  
参加人数 園児・保護者・教職員  
260名



### 那須地区 すぎのこ幼稚園

期日 10月17日(水)  
場所 ゆけむりふれあいの丘  
参加人数 園児・保護者・教職員・  
その他67名



### 塩谷地区 氏家幼稚園

期日 10月20日(土)  
場所 ゆうゆうパーク公園  
氏家駅周辺  
参加人数 園児・保護者・教職員・  
その他490名



### 日光地区 きぬ川幼稚園

期日 10月24日(水)  
場所 きぬ川幼稚園周辺・  
湯の街公園・滝見公園  
参加人数 園児・保護者・教職員  
43名



### 鹿沼地区 いずみ幼稚園

期日 10月24日(水)  
場所 千手山公園  
参加人数 園児・未就園児・  
保護者・教職員  
200名



## 研修会だより

### 第二回保育テクニカル講座

期日 平成二十四年九月六日(木)  
会場 栃木県総合教育センター  
参加人数 百三十五名  
テーマ「幼児期の学びのスパイラル」  
講師 前白鷗大学はくおう幼稚園 園長

大塩 宗里氏

※メモ  
「学びのスパイラル」を知る講  
話と、廃材をつかったのおもちゃ  
製作で有意義な時間になった。

学習とは自主的な取り組みで、子ども  
のもつ興味関心が経験につながり、発見  
し、感動し、また探究心がうまれて次の  
経験へとつながる。そして、それらの記  
憶が人として成長するために必要で、記  
憶が積み重なり始めるのが3歳の幼児  
期。子どもたちの発見や感動を一番身近  
で一緒に共有できる  
のが私たち教師。子  
どもと一緒に、同じ  
ように発見・感動す  
ることが、子どもを  
学習に導くために大  
切で、どこにいても  
新しい事を発見でき  
るよう、環境づくり  
を工夫していくのが  
私たちの仕事だと感  
じた。

後半は、新聞紙な  
ど、身近な廃材で作  
れるおもちゃや割れ  
にくいシャボン玉液



### 設置者・園長経営研修会

期日 平成二十四年九月十二日(水)  
会場 二荒山会館(鶴の間)  
参加人数 九十九名  
テーマ「子ども・子育て支援の  
動向と私幼の課題」  
～問われる保育の質と  
子どもの生活保障～

講師

(有)遊育 代表取締役兼発行人

吉田 正幸氏

※メモ  
今回の設置者・園長経営研修会  
は、石嶋理事長の挨拶より始まり、  
子ども・子育て関連3法案を中心  
に具体的な解説を交え、話が進められた。  
これからの幼児教育における解決すべき  
課題や本法案への  
期待と課題につい  
ての話をされた。

また、認定こども  
園に関しては、認  
定こども園の特  
徴(メリット)や  
認定こども園が増  
えて行かない要因  
(デメリット)を  
紹介され、現状の  
認定こども園制度  
の改善に対する期  
待と課題について  
も言及された。こ  
れからの幼稚園経  
営に非常に参考と  
なる内容だった。





## 第二回保育セオリー講座

期 日 平成二十四年十月十七日（水）  
会 場 栃木県総合教育センター  
参加人数 百四十六名  
テーマ「発達と学びをつなぐ  
幼保小連携」

講師

栃木県総合教育センター 幼児教育部  
栃木県幼児教育センター  
指導主事 前原 由紀氏

ひもろ 幼保小の連携を充実させるため  
「子どもの交流活動」「連絡体制の  
整備」「教職員の相互理解」「一貫  
性のある指導計画の作成」の四項目につ  
いて詳しい説明がなされた。

また、幼稚園教育要領では、指導計画  
作成にあたっての留意事項として、ス  
ムーズに乗り越  
えらるよう大  
単元から徐々に  
各教科に分化し  
ていくスタート  
カリキュラムの  
編成が効果的と  
の事。

幼稚園と小学  
校が同じような  
ことを行ってい  
き段差を無くし  
ていくことが大  
切であり、滑ら  
かなカリキュラ  
ムの接続によっ  
て、改善・充実  
が図れる事を学  
んだ。



## 宇都宮大学教育学部附属幼稚園 公開研究会

期 日 平成二十四年十月二十三日（火）  
会 場 宇都宮大学附属幼稚園  
参加人数 百一人  
テーマ「仲間の一員としての「私」の  
在り方 子どもと大人が共に規範意識  
を高め合うために」

ひもろ 昨年に引き続き「仲間の一員と  
しての「私」の在り方」という研  
究主題について、多数の参加者を  
迎えての公開保育研究会が開催された。

午前の部は、各々のクラス保育の参観  
と保育研究と  
して、主題に  
即して活発な  
意見交換が行  
なわれた。

午後の部で  
は、全体会と  
して担当教諭  
によって行な  
われた研究発  
表の後、東京  
学芸大学総合  
教育科学系  
教授 岩立京子  
先生の「幼児  
の規範意識は  
どのように芽  
生えてくる  
か」をテーマ  
に講演が行な  
われ、充実し  
た公開研究会  
となった。



## 第三回保育テクニカル講座

期 日 平成二十四年十一月十三日（火）  
会 場 栃木県総合教育センター  
参加人数 百四十四名  
テーマ「絵本の力を生かす力に」

講師

福音館書店 第1童話編集部  
編集長 松本 徹氏

ひもろ 自分の好きな絵本を傍に置い  
て、その絵本が持つ力の引き出し  
方をたくさん教わった。何より読み手  
がその絵本をよく知ることが大切。ペー  
ジのめくり方や間の取り方、声の出し方  
や読むときの表情など、絵本をわかっ  
ていれば読み手に余裕ができ、子ども  
たちが見て、より伝えたい思いが届く  
ことを確認した。

紙とインクでできた絵本は、読まれ、  
聞かれて、完成する、という考え方に  
納得。絵が動かないから、ページをめく  
らないと次にいけないから、いろいろな  
解釈ができるから「想像する力」が育つ  
と、読み方によって発揮される力はと  
ても大きいことを知り、  
もっと保育で絵本を  
活用したいと思っ  
た。さらに、脈絡が  
ある物語を繰り返  
し聞くことで「物語  
化する力」が育ち、  
自分の中で考えを  
整理してから相手  
に伝えることが  
できるようにな  
っていく、とい  
うことも教わり、  
読み聞かせの時  
間をもっと大切  
にしたいと感じ  
た。



## 設置者・園長経営研修会

期 日 平成二十四年十一月三十日（金）  
会 場 二荒山会館（鶴の間）  
参加人数 百九名  
内容① 「認定こども園制度の改善」  
に関するアンケート報告  
講師 認定こども園あかみ幼稚園  
園長 中山 昌樹氏

講師

認定こども園あかみ幼稚園  
園長 中山 昌樹氏

内容② 「機能と質の向上」認定こ  
ども園に求められるもの」  
講師 認定こども園とは、どう進める  
べきか？  
園長 若盛 正樹氏

ひもろ 機能と質の向  
上のために、  
まだまだ難し  
いことがたく  
さんあるのだ  
はないか。自  
分たちでこ  
れからどう幼  
稚園を進めて  
行くか、難し  
さを感じた。

毎日の生活の  
中で一番子ど  
もの事を考え  
子どもたちが  
元気に楽しく  
過ごせる幼稚  
園を、これか  
ら今までも以  
上に考えてい  
く必要性を実  
感した。







## 小山式保育園

栗の実幼稚園  
理事長・園長 平野 章雄 先生



平成十七年に  
次世代育成支援  
対策法が制定さ  
れたのに伴い、小  
山市では「小山

市における子育て支援等施策基本計画」を作成した。平成十七年三月時点で、小山市の幼稚園は二十一園（定員四千二百五十人）に対し、保育園は市立十三園・民間十園の合計二十三園（定員千七百三十五人）で、小山市の保育所（園）の実員は二千七十二人で三百三十七人の超過人数となり、入所児童が一番多くなる年度末では百二十三日に達してしまつた。一方、幼稚園の定員充足率は七十九%であつた。小山市では平成十二年を境に定員超過状態があらわれ、保育所（園）への入所児童数の増加の高まりに伴い、年度を追つて定員の拡大を図つてきたが追いつかない状況になつていた。この増加傾向は、当面続くものと予想され、定員超過である保育施設への配慮や急増している〇・一・二歳児の適正な保育環境の確保への対応が求められていた。

そこで、「小山市における子育て支援等施策基本計画」の中に「保育施設整備への考え方」を盛り込んだ。既に平成十二年度策定の小山市保育所整備計画では公立保育所については、民間

にできるものは民間に任せていくとの考え方により保育需要に見合った定員を確保しながら、民間保育園の定員拡大を推進し、公立保育所は地域の拠点となる保育所を一部残し順次民営化を図ることを基本として進めていたが、保育需要の急増や民間保育園の定員拡大が厳しい状況になつていた。

そこで、幼稚園における小規模保育園の設置により、定員増を図るべく、平成十七年八月に、学校法人立の幼稚園に対して、以下のような考え方の説明がなされた。

小規模保育園の設置対象者は、社会福祉法人、学校法人、NPO法人とする。

施設整備については、自己資金により施設設置ができる場合を優先する。

設置地域については、(1)保育園への入所需要が継続して、二十人以上見込まれる地域 (2)その地域の既存の保育所（園）において、定員超過が続いており、まだ当面続くものと見込まれる地域

市立保育所の施設の実態から老朽化等により、定員調整せざるを得ないと考える市立保育所があり、引き続き入所需要が見込まれる地域

その他の小規模園の設置が適当と認める地域

応募者の中から九月にヒアリングが行われ、十月の結果通知を受け、学

校法人立幼稚園四園がわずか半年で当時の栃木県児童家庭課との協議、保育所（園）設置認申請書の作成、建築確認申請、入札、建築業者の決定等平成十八年四月開園に向け、急いだ。その後、平成十八年八月に学法幼稚園で一園開園、平成十九年四月に学法幼稚園二園が開園した。学法幼稚園七園合計二百人の定員の拡大となつた。その他、社会福祉法人及びNPO法人により新たな保育園が三園開設となつた他、五園で定員増が実現し、全体で四百五十人の定員の拡大になり、平成二十二年度では入所（園）率が百十七%に引き下がつた。

学法幼稚園では、定員三十名が六園、定員二十名が一園、保育園の開設場所は、幼稚園と同施設内が二園、別敷地での新設が四園となつた。この計画では、幼稚園の空き教室の有効活用が前提になつたが、小規模保育園設置要綱からの必要最低面積の確保に無理があつたり、幼稚園児との施設・設備の共用に対する不安があつたため、幼稚園園地とは別の敷地に新設する園が多かつた。全国に発信し、その後「小山方式」と言われた保育園は、設置主体が学校法人、〇・一・二歳児の低年齢児向けの保育園として三十人以下の小規模保育園ということになる。当初、待機児童の解消という目的から、〇・一・二歳児に限定することに難色を示したが、三歳になつたら幼稚園に誘導し、幼稚園の延長保育の利用でカバーする点を強く主張した。そのために、延長保育制度を充実すべく、保育時間や保

育料の平準化を進め、小山市からの延長保育助成制度も確立した。現在では、月十五日を限度に、通常日二百円／日、長期休業日三百円／日の助成となり、保育園児が幼稚園に入園してからの負担軽減に役立っている。又三歳になつて保育園から幼稚園への入園も年々増え、最近ではほぼ100%の園児が幼稚園に入園している。三・五歳の就園率は、幼稚園六十四%、保育所（園）二十四%の状況であつたのが、平成二十四年度では幼稚園への就園率は、七十一%に上がっている。

保育園を開園して六年目を迎え、利点としては次のようなことが言える。

◆学校法人立のため私学教職員共済組合への加入、栃木県私立幼稚園退職金財団への加入（保育園職員は県の補助金なし）ができたことで、幼保間での不公平感を感じさせなかつた。◆保育園職員に幼稚園職員からの異動や元職員を開園当初から入れたことで、幼保の職員に日常的に垣根が無く、福利厚生活動も一緒に行える。◆幼稚園の園庭や施設の利用など保育園園児が幼稚園スペースを使つての活動を多く取り入れ、園児同士や職員の交流が盛んである。◆保育園行事を幼稚園施設を使って行うこともあり、幼保それぞれ

園児の希望者には利用ができる。又、土曜保育も利用が可能となっている。

◆〇〇二歳児の保育ノウハウや幼稚園より厳しい保健安全衛生面での知識や技術などを幼稚園が取り入れることが可能になったり、逆に幼稚園情報を提供できたりと、相互の情報交換がスムーズになり学園としての一貫性が色濃くできるようになった。◆〇〇二歳児が対象のため、委託料の根拠となる保育単価が高く、経営に役立っている。

一方、職員については、園長は社会福祉施設の経験三年以上・幼稚園園長と兼務できないこと・保育士免許所持者、そして主任保育士は七年以上、全職員の四分の一以上が三年以上の経験が必要という高いハードルの中での職員の確保、施設整備補助金が無く全て学園の自己資金に頼ったこと、保育所(園)認可が社会福祉法人を前提としているため膨大な申請書の作成、運用財産の確保(年間事業費の十一分の一、土地賃借の場合一千万)、調理室の設置、学校法人会計と社会福祉法人会計の二重会計、幼稚園職員と保育園職員の整合性を図ること(就業規則・給与規程等、特に幼保間の職員の異動に問題が発生)、年度当初と年度末の園児数に差があり、年度当初は余剰職員が発生するなどの課題があった。

小山市では、平成十八年度から制度化された「認定こども園」その後の「こども園構想」そして、この八月に可決した「子ども子育て関連三法」の行方を見据えながら、保育所整備について検討を重ねてきたが、平成二十三年八

月に策定した「小山市保育所整備計画」では、①公立保育所の果たす役割を踏まえつつ、民間活力を活かした民設民営方式による保育所整備②保育需要を勘案し、幼稚園にも配慮した保育所の適正配置③子育て環境に配慮し、多様な保育ニーズへの対応しうる保育所整備④社会福祉法人以外の法人も参画できる保育所整備の四つを基本方針とし、公私の役割分担、幼保一体化の動きに対応、就学前児童の人口減少を見据えた整備を基本事項として、現在進めている。

小山市でも、当面は保育需要の増加は進むものと思われるが、学年千五百人台を推移してきた幼児人口であったが平成二十四年度の〇歳児は千四百十七人で、五歳児と比較して六%の減少となり、今後この減少傾向は続くと思われる。又、二〇一五年に新認定こども園への移行により保育施設の過剰が予想される。十年後には現在よりも幼児人口の減少に伴い、保育所(園)の過当競争が起きる恐れがあると同時に、今問題となっている待機児童問題も落ち着くのではないかと考えている。過当競争による保育施設間の充足率の格差などの弊害により保育環境が悪化することは避けるべきで、幼保の総定員数や公立・民間の定員調整などを図っていくことが重要となる。小山方式の小規模保育園も保育需要の増大に合わせて拡大して器を大きくすることなく、幼保の定員のバランスを図りながら進めていくことが好ましいと思っている。(次号へつづく)

## 第28回 全日本私立幼稚園連合会 設置者・園長全国研修会

期 日 十月二十二日(月) 〃  
場 二十二日(火)  
シエラトン・グランデ・  
トーキョーベイ・ホテル  
参加人数 約六百名  
(うち栃幼連からは十五名)

### メインテーマ

「明日に向けて私立幼稚園の振興を考える」

### 「二十一日(月)」

●記念講演「ナルキッソスと美しき湖」  
〃「それって誰のため」

### 講師

メイヨクリニック医科大学精神科  
名誉教授 丸田 俊彦氏

●特別講演「自分だけの表現」〃アール・  
ブリュットの魅力から」

### 講師

絵本作家 はたよしこ氏  
アートディレクター 小林 瑞恵氏

### ●行政報告

「私立幼稚園を取り巻く現状と課題」  
文科省初等中等教育局教育課長

### 「二十三日(火)」

●研究講座(パネルディスカッション形  
式、参加者が一講座選択)  
・教育「良質な幼児教育」の質を検証  
する」

・振興「これからの私立幼稚園の振興を  
考える」〃私立幼稚園が市区町村で位  
置づくため  
には、  
経営「先生  
が来ない!  
あなたの園  
はどうしま  
すか?」  
認定こども  
園「私立幼  
稚園の未来  
と認定こども  
園」



## 第26回 全日私幼連 関東地区代表者協議会 茨城大会

期 日 十一月七日(水) 〃八日(木)  
会 場 茨城県つくば市・オークラ  
フロンティアホテルつくば  
テーマ「私幼の将来展望とこれからの  
行動指針について考える」

●研修Ⅰ 「子ども輝く未来のために」  
宇宙航空研究開発機構

●研修Ⅱ 「幼児の食料と身体の関係」  
宇宙科学研究所 教授 久保田 孝氏

●研修Ⅲ 「私立幼稚園の現状と課題」  
各県私学行政担当者

●研修Ⅳ 「改定こども園の今後の展開」  
文科省初等中等教育局幼児教育課長

●研修Ⅴ 「改定こども園の今後の展開」  
文科省初等中等教育局幼児教育課長

●研修Ⅵ 「改定こども園の今後の展開」  
文科省初等中等教育局幼児教育課長

●研修Ⅶ 「改定こども園の今後の展開」  
文科省初等中等教育局幼児教育課長

●研修Ⅷ 「改定こども園の今後の展開」  
文科省初等中等教育局幼児教育課長

●研修Ⅸ 「改定こども園の今後の展開」  
文科省初等中等教育局幼児教育課長

●研修Ⅹ 「改定こども園の今後の展開」  
文科省初等中等教育局幼児教育課長

●研修Ⅺ 「改定こども園の今後の展開」  
文科省初等中等教育局幼児教育課長

●研修Ⅻ 「改定こども園の今後の展開」  
文科省初等中等教育局幼児教育課長

●研修Ⅼ 「改定こども園の今後の展開」  
文科省初等中等教育局幼児教育課長

●研修Ⅽ 「改定こども園の今後の展開」  
文科省初等中等教育局幼児教育課長

●研修Ⅾ 「改定こども園の今後の展開」  
文科省初等中等教育局幼児教育課長

●研修Ⅿ 「改定こども園の今後の展開」  
文科省初等中等教育局幼児教育課長

●研修ⅰ 「改定こども園の今後の展開」  
文科省初等中等教育局幼児教育課長

●研修ⅱ 「改定こども園の今後の展開」  
文科省初等中等教育局幼児教育課長

●研修ⅲ 「改定こども園の今後の展開」  
文科省初等中等教育局幼児教育課長

●研修ⅴ 「改定こども園の今後の展開」  
文科省初等中等教育局幼児教育課長

●研修ⅵ 「改定こども園の今後の展開」  
文科省初等中等教育局幼児教育課長

●研修ⅶ 「改定こども園の今後の展開」  
文科省初等中等教育局幼児教育課長

●研修ⅷ 「改定こども園の今後の展開」  
文科省初等中等教育局幼児教育課長

●研修ⅸ 「改定こども園の今後の展開」  
文科省初等中等教育局幼児教育課長

●研修ⅹ 「改定こども園の今後の展開」  
文科省初等中等教育局幼児教育課長

●研修ⅺ 「改定こども園の今後の展開」  
文科省初等中等教育局幼児教育課長

●研修ⅻ 「改定こども園の今後の展開」  
文科省初等中等教育局幼児教育課長

●研修ⅼ 「改定こども園の今後の展開」  
文科省初等中等教育局幼児教育課長

●研修ⅽ 「改定こども園の今後の展開」  
文科省初等中等教育局幼児教育課長

●研修ⅾ 「改定こども園の今後の展開」  
文科省初等中等教育局幼児教育課長

●研修ⅿ 「改定こども園の今後の展開」  
文科省初等中等教育局幼児教育課長

●研修ⅿ 「改定こども園の今後の展開」  
文科省初等中等教育局幼児教育課長

●研修ⅿ 「改定こども園の今後の展開」  
文科省初等中等教育局幼児教育課長









実技を通して幼稚園教育要領や保育所保育指針の理解推進を図る「スキルアップセミナー」を開催しました。三つの講座とも、前半は教育要領・保育指針における位置付け、テーマに関する県の取組や方向性等を確認し、後半に実際の保育に生かすための実技を行いました。それぞれについて、講話内容や活動の様子を紹介します。

### 保育に生かせる

#### 食育に関する研修

期 日 七月五日（木）  
受講者 三十三名

県農政課の技師より、「栃木の地産地消」の講話があり、地産地消のよさや、栃木県全国一位の農産物など、地域の食について学びました。また、「幼児期からの食育」の講話では、和やかな雰囲気の中で食べることを楽しむ経験の大切さや、食育を通して育まれる季節感や健康な体について考えました。受講者からは、「残さないように食べることなどを注意するのではなく、その子が『今、楽しいな』と思えるよう援助したい』『お腹がすくように、体をいっぱい

動かして遊びたい」などの意見が出ていました。

栃木くらし研究所代表の柏村祐司先生からは、地域に残る行事や慣習についての講話があり、幼児が地域の文化に親しむために、保育者自身が関心をもつことの大切さを学びました。実技では、女性農業者会食育応援団の指導で、「小麦饅頭」を作りました。受講者は、蒸しあがって大きくふくらんだ饅頭を見て歓声を上げ、幼児と一緒にこの感動を味わいたいと、期待もふくらませていました。



### 保育に生かせるリズム・音楽に関する研修

期 日 九月三日（月）  
受講者 四十八名

県学校教育課指導主事より、「子どもの発達と音楽表現」の講話があり、小学校以降の音楽の教育内容を学びました。また、「幼児期の表現活動について」の講話では、幼児が自ら表現する楽しさを味わう経験の大切さを考え、受講者からは、「歌う活動にも、教育要領のねらいを踏

まえて取り組んでいきたい」「幼児期は音楽の楽しさを知らせ、想像力を育みたい」などの意見が出ていました。

実技では、宇都宮市立西小学校の田代有一校長先生の指導で、「幼児が喜ぶリズム・音楽」と題し、幼児がワクワク、ドキドキする音を使った表現遊びや打楽器の持つ美しい響きを体験しました。教師が「子どもの表現のよさやすばらしさの発見者」になるためのヒントを学ぶことができました。



### 保育に生かせる表現運動に関する研修

期 日 十月二十二日（月）  
受講者 五十六名

県スポーツ振興課指導主事より、「子どもの遊びと体力」の講話があり、栃木県の子どもの体力の現状や、生活や遊



びを中心とした体づくりの大切さについて学びました。また、「幼稚園・保育所における体づくりについて」の講話では、幼児の興味・関心や発達に合わせ、生活や遊びの中で、喜んで体を動かす保育の在り方を考え、受講者からは、「幼児が多様な動きを楽しめるように環境を工夫したい」などの意見が出ていました。

「幼稚園・保育所でできる運動遊び」の実技では、身近な物を使ってできる運動遊びや、友達とふれあう身体表現の楽しさを体験し、日頃の保育を見直す機会となりました。

### 食育ライブラリー情報

幼児教育センターでは、食育に関する教材を貸し出しています。ガイドブックに教材リストを一覧に掲載していますので、ぜひご利用ください。



★来年度も、教育要領の理解推進と指導力の向上のため、研修を企画していきますので、どうぞご参加ください。

